

IV 中学校

いのち 生命を考える

生命とは何なのか。

いま、自分がここに息づいていることの偶然性。

そして、一度しか抱きしめることができないという有限性。

さらに祖先から受け継ぎ、子孫へ受け渡していく連続性。

—— 生命とは何なのだろう。

私たち人間ばかりではなく

生きとし生けるものすべてに

思いをはせてみる。

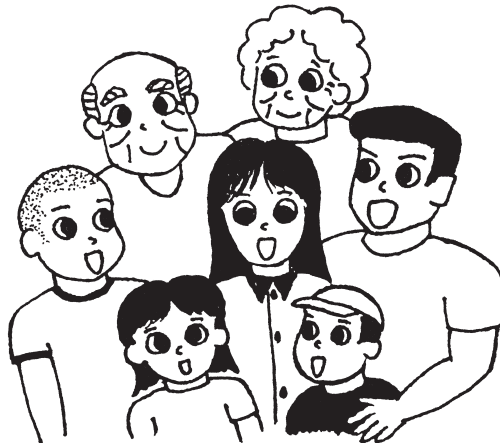
その残り時間を意識したときに

生命に対するいとおしい重いが深まるというけれど

いまの私たちにだって、きっとできるはず ——。

生命とは何なのかを考えること。

(出典：文部科学省「心のノート」 中学校 p.74)



7 愛は命を支える柱になる

私の妹は今、かわいい天使になっている。名前は麻央まお。両親が本を何冊も読んで決めた名前だ。

麻央が産まれたのは三月三日、ひな祭りの日だった。麻央は、染色体の異常から起こる病気と心臓疾患を伴う病気とをもって生まれてきた。九十九パーセントは流産になることが多い。でも、麻央は一パーセントの確率で生まれてきたのだ。両親は病院の先生から、

「すごい生命力です。よほど皆さんに会いたかったですね…。」

と言われたそうだ。しかし、「長くて一か月の命…。」とも言われていた。

麻央はとっても小さくて、心臓だけが強く動いていた。目がクリクリしていて、悲しい時や痛い時は、泣いて意思表示をはっきりする子だった。麻央の泣いた顔や、いろんな顔を見るたびに胸がキュンとした。そんな気持ちになるのは生まれて初めてだった。

両親は、麻央にできる限りのことを最後までしてあげようと決心し、病院から家につれて帰った。じいちゃん、ばあちゃん、親せきの人たちみんなが麻央の様子を毎日見にきてくれた。ほんとうにたくさんの人から愛情をもらった。もちろん、私たち家族もたくさんたくさん麻央を愛した。

あつというまに、三か月の日々が過ぎていた。一か月だと言われていた麻央は奇跡をおこしていた。一日一日、必死で生きていた。しかし、たびたび具合が悪くなり、病院に行くことがあった。そのたびに私は不安になり、誰にも見られないように、トイレやお風呂で一人隠れて泣いた。自分が代わってやりたいと思った。自殺があったというニュースをテレビで見ると思った…。

(その命、麻央にちょうだいよ！)



そして、五か月……。だんだん便や尿が出なくなり、水分が体から出ないため、麻央の手足がはれはじめてきた。チューブで口から与えていたミルクも入らなくなり、顔色が悪い日が続いた。苦しそうな声を出す麻央。つらかった。

八月十七日、麻央はかわいい天使になった。息をしない麻央を病院から家につれて帰るとき、温かかった麻央の体がだんだん冷たくなるのを感じた。

(これが命なんだ。)

そう思った……。苦しくなった。息ができなかった。でも、私以上につらいのは両親だったと思う。母は今まで麻央にどんなことがあっても涙を流さなかった。だけど、その時だけは麻央を強く抱きしめて激しく泣いた。私も泣いた。

麻央のお葬式の日、あるおばあちゃんが、私にこう話してくれた。

「あなたたちがいっぱい愛したけん、五か月も生きられたとよ。」

そのことばを言われるまで私は、麻央に何もしてあげられなかったことをとても悔やんでいた。しかし、その一言で気がついた。

(私の……私の愛で麻央の命を少しでも支えることができたんだ！)

うれしかった。

最近、命を軽くみた事件がたくさんある。絶対に誰かに愛されているはずなのに、命を粗末にしてしまう。私は麻央が生きた意味を無駄にしたくない。命を粗末にする人が少しでも減ってほしい。命の尊さ、大事さをわかってほしい。

そして思う。

人を愛そう！

愛は命を支える柱になるから。

1 資料名 「愛は命を支える柱になる」

2 資料について

中学生の時期には、健康に毎日が過ごせるためか自己の命に対するありがたみを感じている生徒は決して多いとは言えない。身近な人の死に接したり、人間の命の有限さやかけがえのなさに心を揺り動かされたりする経験をもつことも少なくなっている。そのことが、生命軽視の軽はずみな行動につながり、社会的な問題となることもある。自分の命についても生きていてあたりまえという感覚があり、命の危険にさらされたり、身近な誰かの命がなくなって改めてその大切さを実感するのである。

本資料は、鹿町町立鹿町中学校3年の生徒の作文である。難病を伴いながら1%の確率で奇跡的に誕生し、わずか1か月の命と宣告されながらも両親や家族などの献身的な看護に支えられ5か月の闘病ののち亡くなった妹に対し、悲しみにくれるだけで自分は何もしてやれなかったと後悔する。しかし、お葬式の日のあるおばあさんの一言で、自分も妹の命を支えてあげることができた気づき励まされ、共に生きようとする愛は、限られた命をも支えられるということに気づかせられるという内容である。妹が亡くなったあとの気持ちの整理と結論（命の尊さ、大事さ、命はたくさんの人の愛によって支えられているという思いで書いたこと）がきちんと出されていて、命のはかなさや尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重するのに適している資料であると考えられる。

指導にあたっては、本資料を軸に、人の命の神秘性や尊厳を理解し、家族として支え合うという愛と命の関係にふれながら自分の命は自分だけのものではないと気づかせ、命あるものは互いに支え合って生き、生かされていることに感謝の念をもたせるとともに、自他の命を大切にし、精一杯生きることの大切さを感じ取る態度を育成したい。また、「心のノート」p.67に掲載されている詩を朗読することで、生命尊重への意識をさらに高めさせたい。

3 留意点

本資料はノンフィクションであり、筆者が県内の同世代であることを知らせる。また、自分や身近な人の病気（文中の病名なども含む）や死を取り上げる場合は、十分に配慮し、恐怖心や喪失感を助長しないようにする。

4 事前指導の工夫

自分や身近な人が病気になった経験や、身近な人を亡くしたときの気持ちを家の人たちにたずねさせることにより、本時の学習について意識をもたせておく。

5 ねらい

限りあるひとつの命をいとおしみ、その命を精一杯輝かせてあげたいという献身的な家族の姿から、命はかけがえのない尊いものであることを理解し、命あるものは互いに支え合って生き、生かされているという心情を深める。

6 展開例

過程	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	<p>1 自分や身近な人が病気になった経験や、身近な人を亡くしたときの気持ちについて話し合う。</p> <p>あなたやあなたの身近な人が病気になった経験や、身近な人を亡くした経験がありませんか。そのときの気持ちを話してください。</p>	<p>1 自分や家族の気持ちについて考えることを通して、資料への方向付けとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼い時に大きな病気を経験した ・ 必死になって看病してくれた両親に感謝している ・ 肉親を亡くした ・ ものすごく悲しかった
展 開	<p>2 資料「愛は命を支える柱になる」を静かに読む。</p> <p>お医者さんから「すごい生命力です」と言われたとき、どんな気持ちだったでしょう。</p> <p>お風呂で一人隠れて泣いたとき、自殺のニュースに対してどのような気持ちで「その命、麻央にちょうだいよ！」と言ったのでしょうか。</p> <p>病状が悪化して死んでいく妹の様子を見て、筆者はどのような気持ちだったと思いますか。</p>	<p>2 筆者である「わたし」の気持ちになってじっくり読むように助言する。</p> <p>医者の「よほど皆さんに会いたかったですね」の一言や、筆者の心の変化から、命の尊厳や新しい命とめぐりあう喜びについて考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生命力ってすごい ・ どんな赤ちゃんにも生まれ、生きる権利がある ・ どんなに短い命でも大切にしたい ・ 生まれて初めて胸がキュンとした <p>妹の病状の変化に対する不安な思いを家族にさとられないように人知れず涙を流したり、代わってやりたい、命を妹にちょうだい、と必死に思う筆者の深い愛情と、与えられた命を精一杯生きる大切さを感じ取らせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 不安な思いを誰にも見られたくない ・ 家族をこれ以上悲しませたくない ・ 自分が代わってやりたい ・ 命を粗末にはしてはいけない <p>死を実感するとはどういうことか。また、家族を亡くすというつらさはどんなものであるかを感じ取らせる。</p>

展	<p>「あなたたちがいっぱい愛したけん5か月も生きられたとよ」というおばあさんの一言で筆者の思いはどのように変化しましたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・息をしていない ・あたたかかった体が冷たくなった ・これが命なんだなって思った ・母は悲しみを今までこらえていたのだ <p>悲しみと後悔の念の中で言われたおばあさんの言葉の重みを感じ取らせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何もしてあげられなかったと後悔していたが励まされた ・自分の愛で妹の命を少しでも支えることができうれしかった
開	<p>3 自分の今までの命に対する考えを振り返り見つめ直す。 自分の命が誰かに支えられていると感じたことがありますか。</p>	<p>3 命あるものは互いに支え合って生きているということについて考えを深めさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族に支えられていると思う ・人を愛することが人を支える ・親からもらった命を大切にしよう ・自分の命と同様に他の命も大切にしよう
終末	<p>4 教師の説話を聞く。</p>	<p>4 「命はたくさんの人の愛によって支えられていること」にかかわる教師自身の経験を聞かせることで本時の価値の自覚をさらに高めさせる。</p>

7 評価

- ・命について、その大切さやかけがえのなさを感じとることができたか。
- ・人は自分の力だけで生きているのではなく、家族をはじめたくさんの人の愛に支えられているのだということに気付くことができたか。

8 事後指導の工夫

本時の学習について、その様子や感想を家庭に知らせたり資料を掲示したりすることで、さらに命の尊さや家族愛について意識の継続化を図る。

9 参考

「愛は命を支える柱になる」 鹿町町立鹿町中学校3年 川尻 光 作品
読売新聞社全国小中学校作文コンクール 県代表作品

8 あの日帰らぬ父に

普賢岳のもつれ

「なあん？あん煙…。山火事？」

全山緑したたる山頂から立ち昇る真っ白い煙。平成二年十一月、二百年の沈黙を破り、普賢岳^{*}が再噴火した。それから、私のふるさとの山は刻々と姿を変え、活発な火山活動は衰える気配もない。ひとたび火砕流^{*}が起きると、真っ白い煙は灰黒色に変わり、ぐんぐん広がり、空を覆い、山すそへ一気にのびてくる。辺り一面、真っ黒いオーロラに包まれたようで、ガス臭い。「風向きはどっち。」
「大変。灰がくる。」雪のように舞いながら皆さんと火山灰が降る。制服は真っ白、頭も顔も体中が灰だらけ…。目が痛い…。こんなことを毎日のように繰り返していた。

「起きろっ！」

ある夜、父のどなる声が聞こえた。時計を見ると、午前二時をまわったくらいだった。初めは何が何だかわからなかったが、とにかく大変なことが起こっているに違いないと思った。私たちは急いで車に飛び乗った。雨が音を立てて激しく降っている。こういうときの避難場所である北上木場町の公民館に向かう途中、前方をゆっくりと進む消防車と出会った。父は運転を母に任せ、車を降りて消防車を追おうとした。私の父は消防団の一員であった。

「おとうさん…！」思わず叫んでいた。不安だった。

（私たちと一緒にいて……。）（行かないで……。）

でも、ことばにすることはできなかった。訴えるように、私は父をみつめた。

「だいじょうぶ。早く公民館に行きなさい。」

そう言い残して、降りしきる雨の中、父は消防車へと走っていった。

父と別れ、私たち家族は北上木場町の公民館へと向かった。公民館までの距離がとても長く感じられた。父のことが心配でたまらない…。公民館では、避難してきた人が皆、不安な一夜を過ごしていた。雨がひどくなれば土石流^{*}がおこるかもしれない。川は、ゴー、ゴーと音を立てている。

翌朝、父は帰ってきた…。そして、この日から長い避難生活が始まった…。

父は、毎日朝早くから夜遅くまで、雲仙普賢岳災害の警戒に出ていた。たまには、もつれ山頂に近い危険な北上木場町の家に泊まることだってあった。父はなぜそこまでするのだろう。消防団員としての使命は、なんとなく私にもわかってはいたが、家族と離れ、自らを危険にさらし、どうしてそこまで…。父はそれほど災害からみんなを守りたかったのか…。



自宅に戻れない不自由な生活を送っていた私たちに、想像をこえたことが突然発生した。六月三日の大火砕流だった。思い出のつまった私の家、私の生まれた緑豊かな町があつという間に奪われてしまったのだ。行方不明者や犠牲者も出た、という知らせが避難所に届いた。（父がいるはずだ…父は…？）私は祈るような気持ちで、テレビを見つめていた。

「……。」

ことばが出なかった…。行方不明者の中に父の名が…。父はやはりあそこにいるのだ。その瞬間、私は泣きじゃくった。今まで平和に暮らしていた私たちに、こんな不幸がおそってくるなんて。もう家なんてどうでもいい。父が無事救出されてほしい。父が生きていてほしい。ただ一心にそれだけを祈り続けている。しかし…。

住み慣れた私のふるさと、大好きだった私のふるさとは、今は見るも無惨むざんに、灰にうもれている。私の愛した山が、町が、私の家が灰まみれになり、なくなってしまった。でもだれよりも私の愛した父までもが…と思うと、せつなさで胸がいっぱいになってくる。もう優しくかった父の笑顔を見ることもできない。もう励ましの言葉もかけてもええない。もう大きな胸へとびこんでいけない。このどうしようもない気持ちをだれにぶつければよいのだろう。

——そして…。あの日から一年半が過ぎた…。

死に絶えたかに見えた町にも、ようやく活気が戻ってきた。閉められていた店は開き、人の声があふれ、道路は忙しく車が行き交う。灰が降れば負けるものかと水をまき、灰を取り、真正面から山に立ち向かう。精一杯の力で身を守り生きる道を探し始めた。父はこの光景を信じて、死にものぐるいでふるさとを守ろうとしたのだ。いや、父だけではない。あの日、尊い命を亡くした消防団員十二人すべての人がこの光景を信じていたのだと思う。私も山に負けない。私の大事な宝物を奪い取ってしまった山に負けるわけにはいかない。私は全国の皆さんからの温かい励ましと期待に応えられるようにがんばっていききたい。

去年の八月から島原二中生と三中生との共同生活が始まった。

(この新しい仲間と共に、今の苦難に耐え、力を合わせて乗り越えたとき、私たち一人一人が大きく成長する。)

という思いを貫きたい。人は一人では生きていけない。だから、どんな窮地にあっても、ともに助け合い、どんな小さな命でも大切に、みんなを愛し、みんなから愛される人間になるよう努力しようと思う。そんな人間になることが、最後の最後まで私たち家族、そして島原の人を愛し、かけがえのない命を捧げた父へ何よりの贈り物になるのだと信じている。

お父さん、私たちのことをそして島原の復興をいつまでも見守っていてください。

(災害当時の島原第二中の生徒の作文をもとにした資料)

〔用語の解説〕

*普賢岳ふげんたけ… 島原半島のほぼ中央に位置した雲仙岳の主峰(標高一三五四メートル)。

活動後は、平成新山と名づけられた。

*火砕流かさいりゅう… 火山の噴火によって生じた高温のガスと火山灰や火山れきなどの粉体が混ざり合って、山の斜面を急速に流下する現象。時速は百キロメートルを越えることもあり、中心部の温度は千度近くある。

*土石流… 土砂と水がいつしよになって、急激に駆け下る現象。普賢岳の場合、多くの火山灰や火山れきを含んでいるため、大規模な土石流が発生しやすく、豪雨のたびに避難を余儀なくされた。

*尊い命… 平成三年六月三日の大火砕流では、消防団員十二人をはじめ、市民や報道関係者ら計四十二人の尊い命が奪われた。

*共同生活… 島原市立第三中学校が警戒区域となったため、島原第二中学校内に仮設校舎を設置し、二校が共同して学校生活を送るようになった。

1 資料名 「あの日帰らぬ父に 普賢岳のもとで」

2 資料について

自己中心的な考えがはびこる世の中。「自分の欲求が満たされれば…。自己の感情さえぶつけられれば…。」昨今の凶悪犯罪の世界においても加害者の事件の動機に対するコメントにこのようなたぐいのものが聞こえてきてならない。自己を大切にす心、他の命も尊重する心、一つの命が支え支えられ、育まれているという認識が薄い。このことは人と人との関係のみならず、自然と人間との関係にも同様のことがいえる。産業や技術の発展において、人間はいかにも生命や自然、地球を支配し、自在にコントロールして産業や技術を発展させてきたかのような錯覚に陥っている。しかし、いざ台風や地震、津波、火山活動などの災害に出会うと、私たち人間は無力な存在であることを痛感させられる。

本資料は、雲仙普賢岳災害当時、島原市に住む中学生が書いた作文をもとにしたものである。多大な苦悩と悲しみをもたらした歴史的な大惨事の中で、消防団員としての使命を果たし、自己の命を失った父に対する「私」の思いが表現されている。無情な自然への怒り、やり場のない悲しみがぶつけられている。しかしその後、雲仙普賢岳災害からの復興を願い、助け合いながら自然と共に生き抜こうとする郷土島原の人々の姿を見て、自己犠牲をはらった父の死の意味について「私」は考えを新たにし、一つ一つの小さな命に対しても思いを寄せるようになる。

指導にあたっては、消防団員としての父の使命感に注目させていきたい。危険を冒しながらも、ふるさと、住民、そして家族を守ろうとして従事し続けた生きざま、任務を超えた一つ一つの命を思う父のやさしい心を感じ取らせたい。父の思い、そして、同じくして亡くなった他の消防団員11人の思いをとおして考えを新たにし、前向きに生き抜こうとする「私」の心を感じ取らせたい。大自然の脅威の中で人間は時に無力であるが、その無力さを自覚しつつ自他の命を尊重し、共に助け合い、育みあいながら生き抜こうとする人間の強さを感じ取らせる授業を展開したい。

3 留意点

父の生き方、私の前向きな考えなど人間の強さが見える資料であるが、私のやりきれなさ、自然に対する人間の無力さなど「人間の弱さ・はかなさ」に共感する心も大切にしたい。

4 事前指導の工夫

雲仙普賢岳災害における資料をもとにした資料であるが、本授業にあたって、長崎県は過去、諫早・長崎の大水害など歴史的に数多くの悲しみ、苦しみを経験してきたことを認識させておきたい。また、その復興をかけ、今も懸命に努力し続けている県民多数の姿を知らせておきたい。資料の分量が比較的多いので事前に配布して読ませしておくことも有効である。

5 ねらい

愛する人を失った深い悲しみを感じ取り、他の命を大切に思い自己犠牲をはらう人間の生きざまをとおして、自他の命を尊重し、前向きに生きる心情と態度を養う。

6 展開例

過程	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	<p>1 他人の命に対しての自己の意識を確認する。</p> <p>あなたの目の前の海でおぼれている人がいます。あなたはどんな行動をとりますか。</p>	<p>1 他人の命を大切に思う心はありつつも自分が危険を冒してまでも守ろうとする気持ちがあるかどうかを確かめさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すぐに泳いで助けに行く ・助けを求める、叫ぶ ・怖くてじっとしている ・あわててしまって、何もできない ・自分も危険なのでどうすることもできない
展 開	<p>2 資料を通して、父の使命感や生きざまをとらえる。</p> <p>お父さんはどんな思いで「だいじょうぶ。早く公民館に行きなさい。」といたったのでしょうか。</p> <p>お父さんはどのような気持ちで家族と離れ、自らを危険にさらしてまでも消防団員の仕事を続けたのでしょうか。</p>	<p>2 危険をかえりみず、消防団員として行動した父の生き様を考えさせ、父の消防団員としての使命感をとらえさせる。</p> <p>自然に負けたくないという気持ちと家族を思う気持ちを想像させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・だいじょうぶ、死なないから ・いつものように帰ってくるよ ・用心して行きなさい ・心配しなくていいから、みんなの迷惑にならないようにしなさい <p>くじけそうな気持ちや家族を思う気持ちに打ち勝つ使命感について考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・消防団員であることを最後まで貫きたい ・それほどふるさとを守りたかった ・人の役に立ちたいと思った ・「自分がやらないと、誰がやる」という思いがあった ・自分がかんばれば愛する家族も守れると思った ・自分も怖い消防団員の仲間と共に、ふるさとを守るため普賢岳災害と戦わねばならなかった

展	<p>亡くなったお父さんは「私」にどう感じ、どう生きてほしいと思っているでしょうか。</p>	<p>父の娘に対する気持ちを想像させることで、家族を愛する心や地域を愛する心、希望を持って生きていく大切さを感じとらせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな窮地でもみんなで助け合って生きてほしい。 ・自分だけでなく、周りの人のことも考えられる人になってほしい ・命をみんなで守ってほしい ・大切なふるさとを最後まで守り続けてほしい ・自然の脅威をみんなと協力して乗り越え、前向きに力強く生きてほしい
開	<p>3 父を亡くした主人公の深い悲しみを感じ取り、父の死の意味を考え、自分の生き方について意見をまとめる。</p>	<p>3 自他の命を尊重し、共に助け合い前向きに生きることを自覚させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の命だけでなく、人の命も大切にして生きようと思う ・消防団として人の命を守ろうとする父の生き方に命の尊さを感じた。 ・自分の命を守って（支えて）くれているものについて考えることができた。
終末	<p>4 教師の説話を聞く。</p>	<p>4 自分の命を支えてもらった経験、生きていることのすばらしさ、生きる喜びを教えてもらった経験について語る。</p>

7 評価

- ・愛する人を亡くした悲しみ、他の命を救うために自己犠牲をはらう人間の気高い生き方を感じ取ることができたか。
- ・自他の命を尊重し前向きに生きる態度が育ったか。

8 事後指導の工夫

災害の中、自己犠牲をはらって人を救出した話は数多くある。他の書物やビデオ等を通して本指導のねらいをさらに深めていくと効果的である。また「心のノート」p.64～67にある大自然の雄大さや命の有限性なども参考にして、本資料の補充として活用する。

9 参考

児童生徒体験作文集「災害を超えて」 編集 島原市教育委員会